

「底が突き抜けた」時代の歩き方 256

「在日」はもう飽きたね、だけど……

映画『GO』の中で、主人公が自身ほとんど気に留めていなかった「在日」を恋人に、ホテルで抱き合う寸前に告げる場面がある。自分ではなんとも思っていなかったのであれば、敢えて告げなくてもよかった。しかし、彼はキス程度の仲であれば言う必要もなかったが、「一線」を越える親密な関係に踏み入るのであれば、一応言っただけのほうがよいと礼儀のように感じたのかもしれない。ところが、告げられた相手にとっては、「在日」は礼儀以上の深刻な問題であった。彼を日本人と思って付き合いしてきた彼女にとって、「在日」は自分の世界の中に存在していなかったのだ。つまり、彼は日本人社会での他者にほかならなかった。彼女から拒絶されたとき、彼は「在日」であることを告げた自分の行為が、相手にとって他者であることを知らせたことになり、相手からの拒絶によって初めて自分を日本人社会での他者として位置づけねばならなくなったのである。

もちろん、彼が日本人社会で自分を他者と位置づけたのは、日本人社会がそう仕向けているからであって、彼が望んでそうしたわけではない。彼女は日本人社会の一員として、「在日」の彼との交流を拒んだのである。すこし古い雑誌であるが、『文藝』（86・秋季号）で「さまざまな 在日」の特集を行っており、そこで作家の桐山襲（故人）が、関東交流集会実行委員会編『指紋押捺拒否者への「脅迫状」を読む』（明石書店）から、日本人による脅迫状をいくつか次のように取り出している。

《貴男も法治国家の人なら、自分の国の法律に文句を言ふ外国の方によい感情は有りません。親の代からなら、なんで我が国の人にならないか。自分の国のほこりがあらるれば、私達も同じ気持だ、無理におして下さいとは言いません。遠慮なくお帰り下さい。お互ひに自分の国の立場から考へ様では有りませんか。》

《拒否するなら朝鮮に帰えろ、馬鹿野呂。他国に来て大きな顔をするなこの朝鮮人。日本の血が汚れる。》

《君は外国人である。日本を馬鹿にしている。》

《何事も日本に文句言い過ぎます。甘えは止めて下さい》

《指紋押なつ拒否、それを支持する極少数の日本人、哀れに思えてなりません。良く考へて見て下さい。日本に住み日本の法律に従わないあなたはまちがっています。そう思います。日本の法律が嫌で従えないのなら法律のない自分の意志通りになる他の国に移られたら如何ですか。私は日本が大好きです。実に住み良い国です。法に従い毎日楽し

くすごさせて頂いています。》

《世界的に見て、日本程自由民主的な国はありません。貴男の祖国はいかがですか。私は[そうは]思いません。》

《われ朝鮮人やろ、朝鮮人なら朝鮮人らしくせんかい。なにがー外国人や、朝鮮は朝鮮や、指紋を押さんか。日本におれて仕事に有りついただけでも有難うと思へ。朝鮮人は昔からつひらいやか土方ときまつて居る。日本におらして思うなら指紋おすのが当り前。嫌なら朝鮮に一日も早く帰れくされ。》

朝鮮人が何を偉そうに一人前の事ういうのか、ぼそやろう。字を書くだけでも胸が悪くなる。朝鮮人きさまが行って居る保育所は朝鮮人ばかりで解のわからない奴馬鹿りだろ。ぼそはぼそだ、このやろう。》

桐山襲はこれらの脅迫状について、こう推測する。《これら夥しい無名の作者たちは、いかなる情熱によって文章というものを書いたのであろうか。彼らは一貫した排外主義の宣伝家なのだろうか。朝鮮人への憎悪の火を一日も休まず燃やし続けている偏執者なのだろうか。私はそのようには思わない。彼らは日常生活の中では、在日朝鮮人のことなどは考えてもみないであろう。彼らは日々なる憎悪によってではなく、たまたま存在した一つのきっかけによって、自分の精神の底に在るものを突き動かされ、浮上させ、そして洪水のような脅迫状を送りつけてきたのである。》脅迫状の書き手たちがその文章から判断して、戦争をくぐり抜けてきたかなりの年配層と感じられるが、その視線は「在日」に限らず、同じ日本人であっても、単一民族神話に覆われた日本国や日本民族を批判する人々にむけて、非国民、日本が嫌ならどこかへ行け、といった怒号を含んでいそうな気がする。

問題はもちろん、このような脅迫状にあるのではない。普段はほとんど意識していないのに、なにかがきっかけになって、深く埋もれていた固い岩盤が露出するように、どす黒い憎悪の塊が噴出することにある筈だ。これまでの経験からすれば、一旦その塊が噴き出すと、当人も無我夢中で行きつくところまで行かねば収まらなくなっている。映画『GO』の彼女が「在日」を告げた主人公にむかって、「理屈では分かるけど、汚れるような気がする」といって拒絶するのも、同じ岩盤なのだ。理屈ではどうすることもできない固い岩盤の中に、我々は下半身を深く埋め込まれていることが示されているのである。そう、我々は上っ面の理屈で育てられてきたのではなく、理屈なんぞが全く通用しない固い岩盤に足を深く突っ込んで育てられてきたことを改めて認めないわけにはいかない。

『ひきこもりカレンダー』の勝山実は、ひきこもりの人に投げかけられる非難の言葉が、甘い、怠けている、税金払え、といういつも同じ調子の語彙の貧しさ、思考力のワンパターン化を指摘している。「在日」に対する非難も全く同様である。このことは、自分

が受け入れない他者に対する憎悪が自分自身をますます狭量に、貧しくしていくことを露わにしている。自分を豊かにすることで相手に向かうのではなく、自分を貧しくすることによってしか相手に向かうことができない点で、問題が自分の貧相を引きずりだす相手側にあるよりも、相手によって貧相が引きずりだされてしまう自分の側にあるのは明白である。

映画『GO』の彼女が「在日」の彼を拒絶したとき、彼女は本当は自分の中のなにかが明確にされることを拒絶したことは間違いない。表向きは差別を否定し、平等を唱える戦後民主主義の中にどっぷりと育ってきた筈の彼女が、「在日」というかたちであらわれている異質性の問題に向き合うことを拒絶したとき、彼女の貧相と共に、そんな彼女を育ててしまった戦後民主主義の貧相もさらけだされてしまったのである。先の『文藝』の特集の座談会で、「在日」の文芸評論家竹田青嗣が、「一方で、戦後民主主義の、社会に向かうナショナリズムというか、社会をよくするためには、こういう形がいいぞと、皆でもって考えていく、そういうありかたがある。それからもう一方で、市民生活の中で、私等はまっとうな普通の社会人で、あちらに在日朝鮮人であるとか、障害者であるとかいう変なものがある、それは変なものだからきちんとした形にいわば均質化しなければならない、という意識がある。僕の中では、それが主張としては同じ質を持っているわけで、どうも被差別の体験の中には、そういう質とどうしてもなじめないものがあるという気がする」と語るとき、「在日」のままではなく、「在日」が消去されてしまうかたちでしか日本人社会に入っていけない違和感がそこに示されている。

この発言を受けて、文芸評論家の加藤典洋が、「戦後民主主義の問題というのは、戦後民主主義を支えているものが、また差別構造をも支えているんじゃないか、そういう形であるんじゃないか」といいかえながら、差別をめぐる問題の当事者と非当事者をつなぐ契機をその問題から取り出してこなければ、「問題が開かれない、救われない」という。竹田氏と加藤氏がいおうとしていることは、映画『GO』ではどうなるか。「在日」の彼が彼女に拒絶されたとき、彼は自分がこだわっていなかった「在日」を、自分の中に改めてかかえこまざるをえなくなった。「在日」として生きていけと突き迫られたのだから。では「在日」の彼を拒絶した彼女はそのとき、拒絶しただけでなにもかかえこむものはなかったのか。もしそうであるなら、彼は「在日」の社会へ還り、彼女は日本人社会へと還ってくることで、すれ違いが表面化したまま、そこにつながっていくものはなにも見出されない。

もちろん、彼が「在日」をかかえこまざるをえなかったように、彼女も同量だけ「在日」を拒絶した貧相な自分自身をかかえこまざるをえなかった。つまり、「在日」であることの貧しさと「在日」を拒絶する貧しさとは等価であった。別言すると、彼女に映しだされた「在日」の姿を彼が受け取らざるをえなかったように、彼女も「在日」の彼

に映しだされた自分自身の姿を受け取らざるをえなかった。彼女の拒絶はそのことを白日の下に晒したのであり、彼女が曖昧なまま彼の「在日」を受けとめて、なくすしにしていけることもあったことを考えると、納得しがたい別れであったとしても、その納得しがたさが自分たちの意志を越えるところからやってきているのが感じられているだけでも、大変よかったのである。

彼にとって「在日」は紛れもなく異質であったが、その異質性は自分が自分に対して異質であるという根本的な問題を孕んでいた。「在日」の彼を拒絶した彼女の貧相も本当は、自分が自分に対して激しく衝突していないという問題として訪れていた筈である。彼女の問題はただ単に「在日」の彼を拒絶したところではなく、自分が自分に対して他者となりえていない自分自身への見せかけの安住が、その拒絶によって一挙に表面化したところにあった。だから彼女が別れた半年後に、彼に付き合っほしいといったとき、彼女は「在日」の彼でもいいと自分を納得させたわけではなく、「在日」の彼を受け入れようとする自分と向き合って生きていく決心を彼に、そして自分に告げようとしたのである。

映画はそのことを示したが、先の座談会での竹田青嗣は、「差別されてる人間の生きがたさと、自分達の生きがたとが、どこかでつながって（…）相互了解していくという形にどうしてもならない」ことの絶望を語っている。「在日」の竹田青嗣にとって、「自分の問題をいかに普通の在日日本人の問題につなげていくかということが問題の前面に出てくる」（加藤典洋）としても、映画の彼女のように、自分の問題として「在日」の問題につなげていこうとする人間が在日日本人の中から出てこないことには、問題はつながりようがなかった。「在日」の自分の中から自分が出て行くから、そちらも在日日本人の自分の中から出てきてほしいということであったが、事態は絶望的であったのだ。

では、どうすればいいのか。竹田青嗣は座談会の終わりの方で、こんなことを言っている。「それはなんか社会的な差別の問題だと言っても根本的には納まらない。自分で自分の生きることを引受けなければいけないし、自分が苦しかったら、自分で自分を助けなければしょうがない。／そのときに、自分がどう生きていくかということ、自分の小さな格律を立てて、自分の生き方を少しずつ踏み固めてやっていくだろう。」「在日」としての自分の問題と、在日日本人の問題とがどうしてもつながらなければ、それは仕方がないけれども、あくまでも自分は自分の苦しさを自分で助けながら、生きていくことには変わりはないといっているのである。自分が引き受けなくてはならない問題を生きようとすることで、つながりが開かれていることが大事なのだといっているようにも聞こえる。それは「書く」ことについての次の発言からも伝わってくる。

「書くんだったら、僕は在日の立場でこうだよということを訴えるというんではなくて、別の場所でぜんぜん生きている体験も違うし、そこからつかみだしたものも違う形で生

きている人間がいて自分がこういう形で生きたけれども、そっちへ伝わるかどうか、つまり伝わるかどうかということに賭けよう。それだけが問題であって、ほんとうに真理を言っているかどうか、どれだけ大勢の人に言えるかどうかはいつてみれば天の配剤であって、ただ誰かの体験の核に自分の体験の核が届くかどうかという努力は払わないといけない。

それは、書くということに関係なく生きるときには、自分の生きる場所で最大の努力をしたほうが自分をよく支えられるのと同じであって、別に書かなければ、自分の考えてきた世の中に対する考え方とかを、誰かに言えなくたってかまわないし、死んでしまえば終りだというふうに思っているんです。

だから、書く以上は何かが届くかどうかに賭けるという覚悟は、僕の中であって……」

ここですでに「在日の立場」といった枠組みが解体されようとしている。「自分の生きる場所」の中で「在日の立場」は融解しつつあり、「最大の努力」に耐えられなくなっている。映画『GO』でいえば、「在日の立場」に囚われているのは「在日」の彼ではなく、日本人の彼女にほかならないことがここで明白にされているのである。等身大の在日を描いてみせた映画『月はどっちに出ている』の崔洋一監督は作家の宮崎学との対談（『論座』98・8）で、もっとはっきりと言い切っている。「在日の問題を語るとき、今も往々にして観念的な要素が入り込み、精神的・物質的な交流史や正史として語られがちです。そこに危機感が加わると、在日の実体が希薄化し、代わって観念としての幻の祖国が作り上げられていく。この「病理」は世代を超えていて、若い人がある日突然、本名を名乗って民族主義者に変身してしまう」というような観念的な急進性に盲目にされずに、「韓国籍・朝鮮籍を合計して、今、在日の人が一世代から四世代まで70万いるとすれば、70万通りの生き方と考え方がある、その一本一本を基軸にしようよ、ということ」なのだ。

しかしながら、「在日」の人の「70万通りの生き方と考え方」の「一本一本を基軸」にするというとき、では、その一本一本の基軸の中で「在日」という問題はどのようにかかえこまれていくのか。崔氏は、「在日は今もたかさんの問題を抱えているけど、細かいことのいちいちに、なぜこんなにこだわるのだろう、という思いが僕にはありますね。僕は、植民地や日帝時代の70年に及ぶ在日のこれまでの歴史や、在日が運動で積み重ねてきたもろもろを消去しろと言っているのではない。そうではなく、それに引きずられて、自分ひとりの一回かぎりの人生を犠牲にすることはないと言いたいただけなんです」と答える。「在日」をかかえることでもしその人の人生が貧しく狭められていくとするなら、「在日」なんて放り出してしまえばいい、と言っているのだ。その言葉の裏には、「在日」の問題に囚われて痩せ細っていく多くの人たちを目撃する中で、どうして「在日」の問題をかかえこむことによって、人はより一層豊かな人生を送っていく

ことはできないのだろうという反問が押し隠されている。だが、それははっきりしている。「在日」の問題の貧しいかかえこみかたしかしていないからだ。つまり、「在日」の問題の中で人は生きているのではなく、死んでいるからだ。ということは、人が等身大で生きていくことのできるような「在日」の問題として捉え直していく必要があるということである。

「宮崎さんは、これからの在日は韓国籍・朝鮮籍・日本籍などにとらわれず、クレオール、つまり混在文化をつくりだす必要があるとおっしゃってると思うんですよ。それには僕も同感で、映画でそれをやっているつもりです。何しろそちらのほうが気持ちいいから。」

僕がこれまで撮ってきた11本の映画のうち、在日を取り上げたのは『月は - 』と最新作の『犬、走る』の2本だけです。僕は映画監督として、ずっと自分が撮りたい映画を撮ってきた。なのに、僕が監督デビューしたころ「なぜ、在日である崔は在日問題を積極的に扱わないのか」という批判が起きました。その批判は在日の関係者や組織からだけでなく、日本人の、特に識者と呼ばれる人たちのなかからもずいぶん出たと崔氏は述べ、「どんな映画を撮るかなんて僕の勝手ですよ」という。この「僕の勝手」は映画『GO』の原作者である金城一紀に着実に引き継がれている。

金城氏は慶応大助教授の小熊英二との対談（『中央公論』01・11）の中で、「在日文学を読んで、全然僕がなじんできた生活が描かれていない。だから読んだときに『何、スカしてんの』『もっと俺たちの生活を書いてくれよ』という反発が、まずあった」し、「これまでの在日文学は、歌舞伎みたいな伝統芸能と一緒にだと思えます。いま生きている僕たちにはリアリティーを感じられない」といい、自分は「在日の書き手」でもなんでもないから、「これまでの在日文学はミニシアターでやってくれ、こっちは全国150館で上映だぜっていう」見通しのなかで作品を面白く書こうと思ったと語っている。

崔氏にしろ、金城氏にしろ、もちろん竹田氏もそうだが、あまりにも過去の事実の中で凝り固まってしまっている「在日」の問題をぶっ壊し、そこから脱け出さないと、いまを生きている人々のところにもどこにも行けないことを我々に伝えようとしている。

「在日」の人々の生きかたから離れて「在日」の問題なぞありえないのである。「在日」の問題の中で生きようとするのではなく、人々が生きる中で「在日」の問題もさまざまにかたちを変えて育まれていくというのが本来のありかたであろう。いうまでもなく「在日」の固定したイメージに囚われ続けているのは、「在日」の人であるよりも、日本人であり、日本人社会であることを、映画『GO』や、以上のいくつかの対談は教えてくれている。

2001年11月21日記